

1967年 — フルブライト留学



Profile — 春日 喬

東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学後、東京大学非常勤講師、お茶の水女子大学大学院教授、ハーバード大学客員研究員、帝京大学大学院主任教授を歴任。専門は臨床心理学、認知病理学（臨床情報処理心理学）、心理療法。主な著書は、『刺激の質と生体反応』（単著、ブレーン出版）など。

大学院後期課程でフルブライト留学に挑戦、筆記と面接（英語）試験で全額支給生に合格しました。留学先は希望通りコロンビア大学に決まり、ここまでは順調でした。その後、East Lansingにあるミシガン州立大学で、各国から来た留学生を対象に入学前の合同オリエンテーションが行われました。

ところが、この期間に或る日突然、国際教育機関（IIE）から、今年のコロンビア大学では、留学生を受け入れないことになったと言われたのです。理由の説明が全くないので悩みましたが、その後、歴史にのこるコロンビア大学紛争が始まっていたことを知りました。翌年の1968年には、コロンビア大学は、建物が学生に占拠され、大学の講義は全く行われないう状態になりました。この辺の事情は、後に出版された越智道雄著、『アメリカ「60年代」への旅』（朝日選書350、1988）の「コロンビア大学紛争」（156-168頁）に詳しく紹介されています。

そんな次第で、IIE から指定さ

お茶の水女子大学名誉教授

春日 喬（かすが たかし）

れた中西部のインディアナ大学に留学することになりました。入学が決まり、日本人は私1人という大学院の寮生活が始まりました。1960年代のアメリカという歴史に刻まれる大変な時期に留学したのだと気付くのに時間はかかりませんでした。ベトナム戦争は底なしの泥沼の状況で、学生の間でも反戦論と戦争支持派の対立があり、白人と黒人の人種問題の深刻化、キング牧師に率いられた公民権運動の高まり、ロバート・ケネディがインディアナ大学にきてアメリカの社会病理について演説をしたのもこの頃です。彼が演台の前に立ち“I need your help”と繰り返し叫んでいた声を鮮明に思い出します。その後ロバート・ケネディは暗殺され、キング牧師の暗殺も私の留学中のことでした。26歳以下の大学院生の徴兵猶予の廃止、「良心的徴兵拒否」学生の国外脱出。彼等と夜を徹して議論したのも私の留学生生活の貴重な体験となりました。

1年目が終わり、大学院教育心理学コースの助手を経て、フルブライト全額支給の延長が許可されて2年目を迎えました。インディアナ大学は、スキナーが以前所属していた影響を色濃く残し、人格理論も実験的データをエビデンスで示す行動主義が主流で、臨床は行動修正（behavior modification）が全盛でした。心理学のカリキュラムは科目番号がP100～P600というように難易度により構造化されていて知識の習得のための準備性が配慮されているのが

特徴です。

この頃すでに保守的な中西部にもコロンビア大学紛争の影響が及び、カリキュラム内容が白人のためのものだという黒人学生のデモがあったのもこの頃です。必読課題の文献量が膨大でネイティブでも全部の読破は不可能で、学生は有志がグループを作り、1人1冊責任をもって要旨を全員に配付し学習して試験に対処する、想像を絶する勉強量でした。私も1冊分担当したことは言うまでもありません。私は、臨床の実践を支える独自の理論の構築を目指し、その構想を書いたレポートが絶対にAをつけないと言われたオルム教授から評価され自信をえて、「刺激の質と生体反応」（対人刺激理論）の構築に向けて始動、1983～84のハーバード大学の在外研究でこれを完成させました。ハーバード大学では、P. S. ホルツマンの下で眼球運動を研究、Infant StudyのJ. ケーガン、S. レズニック、ピグマリオン効果のローゼンタール、イメージ研究のS. M. コスリン、集団研究のR. F. ベールズの各研究者から受けた影響と学恩は計り知れません。1960年代の生き証人の留学体験を字数の制限で語り尽くせないのが残念です。



筆者とベールズ教授（1984）